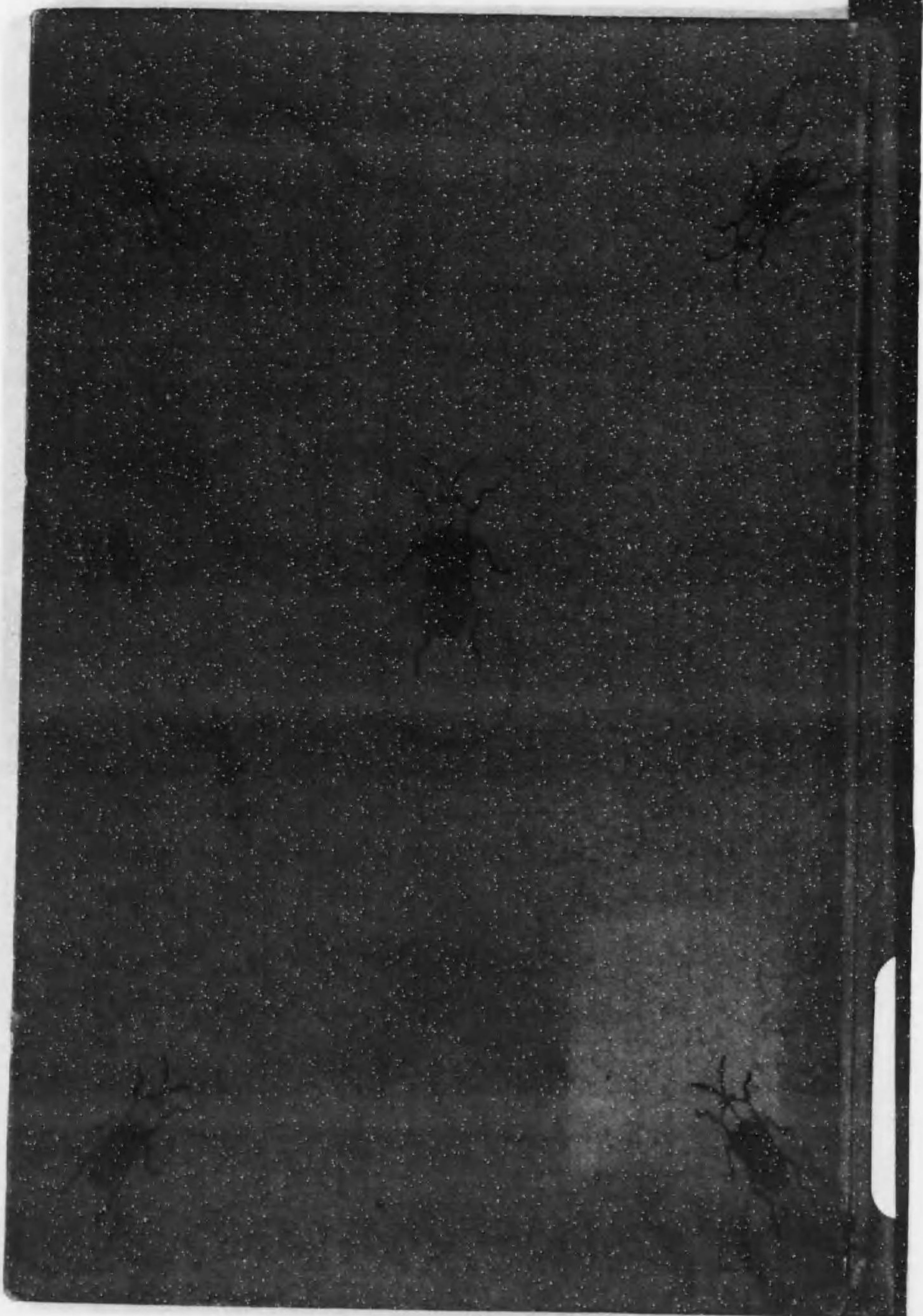


始



打110
23



大正
9. 12. 15
内交

京 東

堂 文 尚

小序

黒いびらうどの小函の中に、紅い寶石が夢を見てゐる美しさを、私はそつと忍び足で近よづてのぞき込んでみたいやうに思ふ。

ここに集めた詩篇は、多くはさうした望みから少女の夢をうかゞつたものである。けれど私の貧しい力は、それらの夢をあまりに貧しくし

はしなかつたかと恐れてゐる、
ともあれ、これを繙いて下さる方々の心に、
ここにある詩篇が少しでも生きることが出来れば幸甚である。
終りに、この集を出すにあたつて、西條八十氏のいろ／＼なお力添へを深く感謝してゐることを記しておきたい。

大正九年十一月

著 者

寶石の夢 目次

寶石の夢	一
影芝居	三
螢	五
秋	七
白い手の人	一〇
こほろぎ	一三
月見草	一六

湖	一九
白日の夢	二二
消えゆくもの	二四
夢	二六
蘆の唄	二八
幻想	三三
時雨	三五
若き日のふたり	三七
指輪	四〇

涙の壺	四一
月	四五
小指	四七
白い蛾	五二
露よ露	五四
ほのの憂ひ	五六
銀の絃	五九
睫毛	六二
きりくす	六三

流れ星	八九
ものの影	九二
宵玉	九六
白い鳩	九八
舞踏靴	一〇〇
悲しみ	一〇一
とつた歳	一〇三
友を思ふて	一〇五
梅の蕾	一〇六

悲しみの雨	六六
獵人	七〇
カナリヤ	七三
ほほゑみ	七七
落日	七九
花の散る日	八一
お花島	八三
葱坊主	八五
異人さん	八八

歌時計	108
抜け毛	110
とんころりん	111
魔術者	113
春	115
夜霧	116
春の手品	118
啞の小鳥	121
赤い林檎	123

初夏	124
秋の夕	126
心	128
眼と手と胸	129
覗き眼鏡	131
三つの心	132
思ひ出の絲	134
心のコップ	136
私は知らない	139

寶石の夢

開かずの窓(詩劇)……………一六

影芝居

私の心こころにくりかへす

秋あきのゆうべの影芝居かげしばい。

泣ないて別わかれたあの人ひとも

憎にくくて別わかれたあの人ひとも

喧嘩で別れたあの人も
昔のまゝにひつそりと
足音もなく忍び来て

私の心にくりかへす

秋のゆうべの影芝居。

螢

「夕べともなれば
われ螢となりて
君が頸にとまり
ちらりほらりと
愁ひをとぼさむ」

あまりつれなき君ゆえに
よしなきことも思ひみぬ。

秋

もの思ふ子に

秋ふかし

祈り捧ぐる

雨の手の

あはれ

いたくも瘠せしかな。

今宵は

月も瘠せほそり

小さく

遠く

かゝれるを

淋しと見たる我なりき。

白い手の人

春の灯は

君の白い手で

ともされて

私の惱ましい影を

くらし胸から

吸つてくれる。

春の鐘は

君の白い手で

鳴らされて

私の悲しい涙を

おもい睨みから

拂^{はら}つてくれる

おゝ！ その君^{きみ}

白い手^ての静^{しず}かな人^{ひと}！

その人^{ひと}を

私^{わたし}は知らない！

こほろぎ

あきかぜ

忍^{しの}びよる

くさむら

忘^{わす}られし

鎌ひとつ

白く光る

あきかぜ

忍びよる

くさむら

こぼろぎ

鎌に止り

唄は亂る。

月見草

月を慕うて

咲く花の

月が出ぬとの

ためいきが

まぢつて匂ふ

河原かぜ

たゞさわくと

月を呼ぶ。

花はゆらく

河原の水に

夢をゑがいて

ゐる頃を

ひがしの山が

ほのめいて

ほゝゑみながら

月が出る

潮

淋しき胸をうつ波

泡立つしろい花を

散らせじと手にすくひ

そと香をかげば――

なつかしさあまりて

はかなきくちづけ
あゝ、今し赤い月は
かなたの沖に昇りぬ。

白日の夢

「どこかで見えた花——

夢のなかに

ほつかり咲いた花か

「どこかで見えた人——

夢ゆめのなかに

いたましく泣ないた人ひとか

春はるの日ひの

ほのかにあまき

うれはしさ

夢ゆめのさかひに

身みをおいて

夢ゆめを夢ゆめ見る

わがこゝろ。

消えゆくもの

野路のかなたのばらそるの

赤と青との悲しみは

遠く消えゆく思ひ出の

いとしき影のこころして……

秋の野に来て物思ひ

野路のかなたのばらそるの

消えゆく影を惜しむ身に

やさしくのぞく白い月。

消えゆくものをひつそりと

送つて出づる白い月。

夢

ゆふべ、夢のなかで
あたしの胸に咲いた
白いさびしい花。
あたしはその花片が
泣いてゐるのを聞いた。

今朝、眼がさめてから
胸の上をさぐると
悲しい手紙があつた。

蘆の唄

君はよも

忘れ給はじ

幼なき日

うちつれて青き湖邊に

かの日うたひし蘆の唄

寂しや暮れゆく

水の面に

眠るよしなき

われは蘆の葉

蘆の葉、蘆の葉

すゝり泣くよ

たゞひとり」

あゝ！ 君よ

幼なき日の友よ

うつの日も

かの日を思へ

うつの日も

かの唄を思へ

塵のごと寂しき日は。

幻 想

月けふる

海うみのひかり

ほのかなる潮うしほの香かほ

帆ほをかたむけてさすらふ

船ふねのひとつに

淋さびしさはつきまよふ。

わがこころの海うみも

やがて波なみだ立ちて

夢ゆめの船ふねひとつ浮うぶ

あゝわれに許ゆるせ

静しずかに祈いのることぞ！

うつゝの船ふねと夢ゆめの船ふねと

共々にやすらかなれと！

時
雨

わびしさは

軒たゞく時雨

佛壇の灯は細く

胸のおもひは悲し。

叩けども叩けども

うち澄む鐘の響は

時雨の音にまじりて

父戀しさのいや慕る。

若き日のふたり

いつの日か河のほとり

友とふたり

なみだしき

水の上の白き月。

いつの日か河のほとり

友とふたり

笑みて見ぬ

水の上の白き月。

夕べしづけき

水の上の白き月

ひそくと夢を流せば

若き心のさだまらぬ。

指輪

青い月夜に――

金の指輪をつと投げて

友はさゝやく。

ふたりの運をあてませう。」

黒い闇夜に――

銀の指輪をつと投げて

友はさゝやく。

「もうお別れよ。泣いちゃらや。」

涙
の
壺

かくてこの夢はとむれど

われら別れき

みとせのむかし。

月

赤あかき月つきいで

泣なくはをとめ子こ

白しろき月つきいで

泣なくはをとめ子こ

をとめ子は

いとしき涙の聲

ひそくと

月かげをうつす。

小
指

あえかにも

わかき心は

かすくの

指切りもして

あどけなき

約束よそふかく秘ひめたれど

ほのかなる

憂うれひを知りし

その日ひより

金の指輪きんゆびわの

やゝゆるく

瘠やせし小指こゆびの悲かなしけれ。

白の蛾

悲しい記憶を

あたらしく

すまいものをと

兄さんの

かたみの本は

しまつたが……

秋を一人の

さびしさは

とり出して見る

夕あかり

頁くる手の

ふるうこと……

開けばかなし

白い蛾が

秋といふ字の

かたはらで

昔のまゝに

死んでゐた——

露よ露

明けやすき夜を

果しなきおもひ

くるほしく

亂れくゝて

朝は來りぬ。

起き出でゝ見る

陽にきらめく露

わが淋しさを

さと吸ひ寄せて

今ぞ散り行く。

ほのの憂ひ

ひとり侘しく

灯をとぼし

ピアノに倚れどトレモロの

はかなき音は

胸にふる

秋の夜雨の忍び音か

古き匂ひの

歌の譜に

侘しく眼をばそゝげども

並ぶ音譜は

しつとりと

夜雨に濡るゝつばくろか

若き少女は

かゝる夜の

ほの愛ひをいかにせむ。

銀の絃

銀の小絃の

泣いじやくり

指をつたうて

胸に入り

心の糸を

ふるはせて

悲しい歌を

うたはせる。

風よ吹け吹け

夏のかぜ

吹いて小絃の

泣いじやくり

そつとどつかへ

持つて行け

あまりに淋しい

背なるを。

睫毛

をとめは寂しうら悲し

小さい花を友にして

たよりなげにぞ日を暮らし

長い睫氣の濡れとほす。

きりぎりす

夜ごとに深む

秋ゆえに

霧は侘しく

ながれゆき

星は淋しく

またたくが

かこつな啼なくな

きりぎりす。

ふるえてやまぬ

しろがねの

ひびきは胸むねの

殿堂てんどうの

扉しらをくたく

愁うれはしさ

かこつな啼なくな

きりぎりす。

悲しみの雨

悲しみの雨が降る

うす白くけふる

ほのかな愁ひは

さびしい街に漲る。

この夕ぐれ

どこかの家の

くらい片隅で

秋の少女がしよんぼりと

灯を捧げて斬つてゐやう。

少女の白い頬を

はふり落つる涙は
灯をも消すべき
悲しみの雨か。

悲しみの雨が降る
うす白くけふる
ほのかな愁ひは

さびしい街に漲る。

獵人

いとほしき人の

赤きばらそる

いとほしき人の

ろす白き手

いとほしき人の

すゝしきうた—

友よ 君よ

われは狩人

いとほしき君が

心こゝろを捕とらへんとすれど

たゞむなしく

ほろし
幼を撃つ。

カナリヤ

ころも縫ふ

白き手の

ふとも動かす

夕まぐれ。

寂しき影の
掠めしや
をとめ心に
雲のごと。

いなあらず

軒の片陰カナリヤの
たゆげに唄ふ
秋のうた。

そのひとふしに
さそはれて
只かりそめの

もの思ひ。

ほほゑみ

いまはなき君

なつかしき君

ふと浮び出づる

そがほほゑみ——

乳壺ちいつぼに乳ちいみつること

しんしんと胸むねをうつ

まさびしきそがほほゑみ

いまはなき君きみのほほゑみ

かりそめに思おもひ出いで

ながれき淋さびしき涙なみだは。

落 日

春はるの落日いりひあかし

君きみがよこがほ

草青くさあをき丘をかのうへ。

ふと赤あかき詩集しじふを閉とぢ

君は遠き空に

ちつと見入る

春の落日あかし

君のつれなさ

などてわれを見とらるゝ

花の散る日

花の散る日に

おもふこと——

「よろこびに

つながるよりも

お花畠

かなしみに
つなときがる時に
しみぐと
君きみのころの
しのばるゝ。」

葱坊主

てのひらに

白い坊主ぼうしゅをのせて

思おもひ悲かなしむ

夕ゆふまぐれ。

淋しい小坊主

囃の坊さん

白い小坊主

くりく坊さん。

眼はいたし

涙はあつし

白い小坊主

葱の小坊主。

異人さん

「もうしニホンのムスメさん

お早うありがとさようなら。」

柳の芽ぐむ居留地の

忘れかねたる異人さん。

流れ星

あどけない幻想から

ふと私は眠つてゐる妹の

小さい拳をあげてみた。

もしや握つてはゐないかと

ちつと瞳を凝らして

私わたしはのぞき込んだ。

そのわけを御存じ？

だつて青い星が一つ

ぽつんと寂しく流れて

どこともなく

消えたんですもの。

ものゝ影

くろぬりの

ピアノの蓋を

とちすとき

ふと浮ぶものゝ影

ぬひとりの

薔薇さす針を

止めるとき

ふと思ひづるものゝ影

ものゝ影……

いとも怪しくしのびかに

心にまつはるものゝ影
長く心を亂せしを……

ふと思ひ出て袖裏に

ほてる頬をばかくしにき

ものゝ影……

そはいつの日かお戸棚に

しまひ忘れしチョコレート
銀の衣着るチョコレート。

寶 玉

赤いルビイには

世界がまつかに見えた。

青いサファイヤには

世界がまつさをに見えた。

いづれもおびえ悲しんだ。

けれど——

金の指環にはめられて

少女の指に住んだとき

世界は楽しく

華やかだった。

白い鳩

白壁しろかべの白いしろ小鳩こぼとの落書らくがきは

つばさがあればと飛とべやせぬ。

「指ゆびきり鎌かまきりこれつきり

蛙かきが啼なくからかへろ——」

たそがれ時ときを子供こども等は

歸かへる足あしさへはやけれど

鳩はとはだまつてちつとして

飛とばうともせぬいぢらしむ。

鳩はとよ今夜こんやは寒さむからう。

舞踏靴

誰が忘れた心やら

廣間の隅の舞踏靴

春のあかりにちら／＼と

光るとめがねなつかしや。

悲しみ

悲しみを

そつと吸ひとる海綿が

見つかるものなら探しませう。

探した揚句見つければ

そこはかとなき悲しみを

みんな吸はせて捨てませう。

とつた歳

いくつになつてと訊いたらば

紅さし指をそと噛んで

袂のはしをつまぐつて

それから眉をくもらした。

歳と一しよに淋しさを

とつた君とは知らなんだ。

なぐさめかねて私わたくしは

黙だまつて薔薇ばらを手渡てわたした。

友を思ふて

しげ／＼と

君きみを思おもふてある故ゆゑか

あたしの心こゝろにほそぐと

小徑こみちがついた冬ふゆの夜よる。

梅の蕾

一つき二つき

三つめの羽子が

五つの白い羽根ひら／＼と

梅の小枝にとりまつた。

とまつた羽根は梅の花

かたい蕾が今咲いた
清く明るく今咲いた
たそがれ時の白い花

歌時計

春のひとひの物おもひ

静かに歩む年月を

ふり返りみて胸かろし—

かの日の嘆きも憎しみも

さては憂ひも悲しみも

水のごとくに消え去りて—

時計が歌ふちよんきなと

あはせて首ふる気軽さに

春のひとひが暮れかゝる—

抜け毛

落ちた抜け毛を指に巻き
きりつと結んでまた解いて
溜息ついて眼を伏せて
それから髪を結ひました。

とんころりん

とん とん ころりん
とん ころりん
夕ぐれ時のあの音は
君の小琴か風鈴か

とん とん ころりん

とん ころりん

夕ぐれ時のあの音に

酔うて浮んだ夏の月。

魔術者

海です。静かな海です。

ちつと足をつけて

ひややかな水の感觸に

甘へていらつしやい。

そらら、あなたの唇に

しぜんと歌が出来ます。

その歌は赤い珊瑚を

すくノと育てます。

また月を戀ふる人魚に

よろこびを與へます。

ね、ほら、海は魔術者でせう。

春

芽ぐむ柳についひかされて

飛んで来るぞえつばくろは

ひかる簪についひかされて

散つて来るぞえはなびらは。

夜霧

夜霧の中で

溜息ついて

とろりと光る春の月。

たつたひとりで

とぼーと

空を行くのに倦きたのか。

それではあたしも

眠らずに

起きて唄つてあげませう。

春の手品

さら／＼と

足の運びにからむ

袴のすその肌ざわり。

こころを軽くつゝむ

雪駄の下のしろい埃。

さては

パラソルの青を透かす

やはらかな光線の縞——

みんな春の香ばしい手品。

だからつい昨日も

この手品にかゝつた私
とろりと夢を見るやうな
明かるい氣持になつて
二度までも道を違へたの。

啞の小鳥

涙の谷を分け行けば
さびしく立てる十字架に
啞の小鳥がしよんぼりと
翼ぬらしてとまつた。

赤い林檎

白い西洋皿のうへに

たつた一つ載つてゐる林檎

肌はつやくくと赤く

こぼれる匂のほの甘さ

かなしみのしるしか

よろこびのしるしか

あたしには解らない。

たゞあたしはかう呟く。

「きよい少女の心臓を

眼あたり見るやうだ」

初 夏

初夏は……

バラソルの黒檀

その爽やかな手ざわり。

初夏は……

つややかな白絹の靴下

きりつと穿いた足ざわり。

初夏は……

麻のハンケチに刺繍る

頭文字のみどり。

かくて初夏の思ひは

少女の胸に青く生く。

秋の夕

鐘が鳴りました。

月が出ました。

薄紫の思ひ出の國を

ひそかに訪ねませう。

小鳩を掻い抱くやうに

淋しこの胸を抑へて。

心

電燈でんとうに青あをい布すねをかけ

まふたに青あをい夢ゆめをかけ

ひとりピアノをひくならば

せめて笑わらふかこのころ。

眼と手と胸

淋しみしさは

秋あきの日ひざしのきららかさ

さん／＼散ちる金粉きんぷんは

眼めに落おつ

手てに落おつ

胸むねに落おちつ

憂うれはしく

遠とほき思おもひのはろくくと

昔むかしの夢ゆめの戀こひしさを

眼めに見みる

手てに見みる

胸むねに見みる

秋あきなれば

日ひざしを浴あびてほつねんと

たどうつむいてつく息いきは

眼めに泌しみむ

手てに泌しみむ

視
き
眼
鏡

胸に泌む

三つの心

「月の光を浴びると

狂ほしいほど心がざわめくの」

妹はかう云つて

水の中に手を入れた。

しらぐと月の光を砕いて
はてもなく流れる水の淋しさ。
姉はこの淋しい水の心を
手のさきから感じた。

「月の光を浴びると

心の底から嬉しさがこみあげるの」

妹はかう云つて
思ひ切り聲高に唄つた。

唄聲は春の夜のおぼろの中に
ふるへながら消えて行つた。
けれど聞き惚れてゐる妹の耳は
春の夜の嬉しさで赤く染つた。

兄はこの二人の妹を

黙つて見つめてゐた。

「淋しい時には淋しがるがよい

嬉しい時には嬉しがるがよい」

兄は心の中でさう思つて

巧みに權をあやつつてゐた。

舟は這る、軽やかに這る

三つの心を載せて、はてもなく這る。

思ひ出の絲

今日はほんとにいゝ天氣です。

この青空を見てゐますと

心の中までも澄んで来て

ちつとも影がさゝないくらゐ

あたしはこんな時

思ひ出の絲をつなぎ合すが
たまらなく好きなんです。

思ひ出の絲の中には

赤いのも、青いのも

また黄いのもあります。

折々白いのも黒いのもあります。

これをつなぎ合しながら
ぬくぬくと日を浴びてゐると
ほんとに幸福なんです。

赤い思ひ出はお正月。

六つの時にはじめて着た

赤いジャケットを思ひます。

「まるで西洋人そっくりね」

かう云つて

驚いたお隣

小母さんの聲までが

はつきり浮んでまゐります。

青い思ひ出はカルタ會。

八疊のお部屋の電燈の笠は
青ガラスの唐草模様。

「あら、違つてよ」

「いゝえ、こつちよ」

まるでむべ山風のやうな騒ぎ

その上から照らす青い光。

黄い思ひ出は伊豆からのお年玉。

荒縄でしばつた箱を開けると

つややかな肌の蜜柑が

肩つき合せて入つてゐました。

「あらきれいな」と私は握つて

「あたしのダイヤモンド」と云つて

家ちゆうを飛び歩きました。

白い思ひ出はお部屋のカーテン。
冬の間はふさぎ勝の人のやうに
だらりといつも垂れてゐました。
カーテンを揚げて、窓を開いて
こそばゆいほどの草の匂を
早く嗅ぎたいと思つたあたし

其の頃の氣持の白かつたこと！

黒い思ひ出は二月の夜。

月のない暗闇にたつた一人で

あてもなく歩いた記憶

それも夢の記憶ですの。

大きな溝へ落ちて

「あらこわい」と云ひながら
手を握つたまゝ眼を覺しよした。

あゝかすくの思ひ出。

今は十七の春に遭つて

頭髮もいつか一尺にあまり

肩揚げもやがておろす身

けれど思ひ出の絲をつなげば
身も心も幼い昔に歸り
日光までが微笑みかゝる。

心のコツブ

△あよる子の月の唄へ日に▽

—

私は自分の心が、水晶づくりのコツブのやうに、きもちよくすきとほり、明るい光を湛へてゐるのを感じます。

それは三月の晴やかな朝。素晴しく上手な雀の前奏曲。ちりんちゆ、ちりんちゆと囀る聲。その聲を聞きながら、そつとお寢掛の窓掛に忍び寄る、あのあどけない朝風に自分の頭髪をなぶらせてゐる時。

私の眼からは、まだ睡眠が飛び去らないので、私はまるで夢の中にあるやうな気がし

ます。うつとりした、静かな幸福！

二

私は自分の心が、瑪瑙づくりのコップのやうに、つややかに美しく、晴ればれしてゐるのを感じます。

それは三月のひそやかな晝。すく／＼頭を

撞げた花の若芽。輝く日光を浴びて、根元に落す紫の影。ちんまりと心地よく、お揃ひに並んだその若芽を見つめながら、花園の細道をゆつたり歩いてゐる時。私はしみ／＼土の匂を嗅ぎながら、まるで自分までか若芽になつたやうな気がしはじめます。ちつとも心配がなく、生長の喜び

に浸る幸福！

三

私は自分の心が、黄金づくりのコップのやうに、きら／＼と華やかに、それでゐてしつとり落ついて光るのを感じます。それは三月のしんみりした夕、尾は薄絹のやうな

空に隣き、高價な刺繡の飛模様。ひそ／＼と私の肌に迫るうすら冷たい夜氣。ちつと机に手をついてあてどなく物思ふ時。私はうつとり幻を描き、その幻を追ひかけたりします。それは過去や未來の樂しい幻。するとひとりで、私の顔に微笑が昇るのです。まあその幸福！

四

けれど、けれど、そんなに楽しい一日が暮れて、さびしい夜が来ると、私の心のコップの中に、何も入つてゐないのが苦しくなります。あゝ、空虚のコップ！空虚のコップ！私はどうかして、この美しい心のコッ

プに、何ものかを充たしたくなります。その時に私は、たつた一つのものを見出し、それは讀書に耽ることです。

書物の中に書かれた、種々な人たちの心にひきつけられて、私は残り惜しい思ひをしながら、さよならと云ひます。そして心のコップを抱へて、静かな睡眠に入るのです

まあその幸福！

私は知らない

私は知らない。

悲しみが消えて行くやうに、ほのぐと東
の白むわけも、金の車に乗った王子のやう
に、太陽が山の上に出て来るわけも。
私は知らない。

太陽が出たと思ふ間もなく、私の足元に黒い影が落ちるわけも、またその影が私の動くところに動くわけも。
私は知らない。

あゝも美しい太陽が金粉のやうな光を降り注いで、凡てを鍍金するのに、何だつてまた私の足元にこんな汚い影を落すんだらう

おまけに私の動くところに動く意地わる！
ほんとに私は知らない。

私は知らない。

蜜蜂が盗人のやうに、花の戸を押し開いて黙つて甘い蜜を盗むわけも、盗まれてもやつぱり花が嬉しさうに笑つてゐるわけも。

私は知らない。

赤、紫、白、黄、とりぐの花が、蜜蜂

を困らすくらゐ、数多く咲くわけも、春、

夏、秋、冬、一年中いろ／＼な花が咲くわ

けも。

私は知らない。

針を持った危険な虫が、あの美しい花の蜜

を吸ふことが出来るのに、何だつてまた私

みたいな、おとなしい少女が、自由に吸ふ

ことが出来ないのだらう。おまけに蜜の袋

は、ごく小さいのだもの！

ほんとに私は知らない。

私は知らない。

そばかすのやうに汚い小砂利が、道いつば
いにあるわけも、雀のお饒舌が、静かな空
氣をゆすぶるわけも。

私は知らない。

詩人のやうにすつきりした鶴が、雀のやう
にそこらに澤山ゐないわけも、小砂利のか
はりに、美しい寶石が落ちてゐないわけも

私は知らない。

この世を造つた方は、何故美しいものばか
りを、澤山お造りにならなかつたんだらう
美しいものは誰の眼にも、こゝろよい氣持
を起させるものなのに、おまけに私たちは
美しいものが好きなのに！
ほんとに私は知らない。

私は知らない。

私達にマシマロウのやうな、白いむつちり
した手のあるわけも、黒曜石の光も及ばな
いほど、黒いこの頭髮があるわけも。

私は知らない。

歳をとると、日數のたつた茄子のやうな、

汚い手になるわけも、線香の灰のやうな、
醜い頭髮になるわけも。

私は知らない。

何故いつまでも、少女でゐられないのだら
う。この清い胸の中に、何故悲しみを忍び
込ませるのだらう。何も知らずにたゞ安ら
かに、このまゝ生きてゐることは、何故出

来ないのだらう。
ほんとに私は知らない。

開かずの窓

四邊は一面の樹立、樹立の中から白い洋館の黒い窓が一つ見えてゐる。その扉はびつたりと、固く閉つてゐる。
少女二人上手から登場

俊子の獨唱

秋と冬とのさかひ目の
つめたい風が吹いて来た
吹いては来たがぎつとんと
窓を淋しく打つばかり

久子の獨唱

もしや開くかと思つたが
やつぱり窓はひらかない

あんなに蔦がからまつて
錠さへ赤く錆びついた

俊子の獨唱

ほんに如何した窓だらう
住む人もなく荒れはてた
かなしいさびしい黒い窓
喪章のやうな黒い窓

久子の獨唱

この窓見ればつい知らず
うかぶ涙のはら／＼と
頬につめたい淋しさは
窓が開いたら癒らうに

俊子久子の合唱

お伽話のお爺さんー

赤い帽子に、白い髭

首をしやん／＼振りながら

さあ手を打つわ出て来てね

魔法の杖を忘れずに

さうして願ひをかへてね。

二人は一しよに手を打つ、すると赤い帽子をかぶり、ふ
さ／＼した白い髭のお爺さんが出て来る。手には銀の魔

法杖はふづまを持つてゐる。

お伽爺おあやの獨唱

やれ〜御苦勞ごくろう様さまぢやつた
ちようと晝寢ひるねの最中さいちゆうを
手が鳴るてがな手が鳴るてがな三度さんど鳴るな
こりや大變たいへんと出でて來きたら
呼よんだお主ぬしはそなたたち

何か御用ごようでござるかい。

俊子しゅんこ久子くこの合唱

そんなに急いそいでよくまあね
お伽あやの國くにから來こられてね
さすがに偉えらいお爺ぢやさん！
こんなに賞ほめてあげるのよ
だから願ねがひをなかへてね

さうぞ、そこには杖がある。

お伽爺の獨唱

口の達者なそなたたち
なかく巧いことを云ふ
どれ／＼それぢやかなへよう
さあさ、願ひを云つとくれ！

俊子久子の合唱

願ひといふはこの窓を
魔法の杖のおちからで
さつと開いてほしいのよ
ね、お爺さんかなへてね。

お伽爺の獨唱

それは容易しい事ながら
お伽の國の掟では

開けりや悔しい玉手箱
あのお話を忘れたの？

俊子久子の合唱

忘れたわけではないけれど
開いてみたいこの心
窓が開けば心まで
さらつと開く気がするの。

お伽爺の獨唱

この窓開けば何がある
水晶の机、金のゆか
天井に張つた蛇紋石
柱にからむ薔薇の花
壁ははめこの板かどみ
麝香のにほひが漂うて

渡れるともなき小夜曲
椅子の上には白孔雀。

俊子の獨唱

まあ／＼そんなに綺麗なの
ぜひ／＼開けて頂戴よ
それを覗けば悲しみが
跡方もなく消えよもの。

久子の獨唱

少女と呼ばれころよく
生きてはゐるが悲しみは
いつが小さな芽生をば
二人の胸に植えてゐた。

お伽爺の獨唱

ふしぎなことを聞くものだ

少女と呼ぶは悲しみを
知らぬ意味だと思ふたに
その悲しみはどんなこと？

俊子の獨唱

毛糸の手袋編んだとき
途中で糸が切れてゐて
驚く拍子に編針が

さつと小指にさつたの。

久子の獨唱

紅さすために薬指
銀の鉤でちよつきりと
爪を切つたら切りすぎて
ちく／＼後が痛んだの。

俊子の獨唱

大切な青リボン

虫に食はれちやいけないと

文箱の底に藏つたら

たうとう色がさめてたの。

久子の獨唱

フランス土産の人形が

どうした譯かなくなつて

風にくはれて椽の下
掃除の時に出来たの。

お伽爺の獨唱

やれやれそれは悲しかろ

それでは窓を開けるより

ぐるつと廻つて扉口から

家の中へと連れて行かう。